



## 第一章 調教一日目

きっかけは些細な事だった。

黒髪ロングで丸メガネ、真面目を体現したような女の子「楠《くすのき》 美羽《みう》」。

地味で引っ込み事案な美羽は、学校の9割が男子で構成されていることもあり、ろくに友達もできず、静かな毎日を過ごしていた。だが、実のところ彼女は男子たちの注目の的になっていることを知らない。

顔は地味だが、それよりも下……つまり、体は非常に毒性の強い物をもっていたから。

背丈は低い、はち切れんばかりの爆乳。決してデブではないが非常に肉付きのよい下半身。それに加え、気弱な性格だ。

——今思えば、雄の理性を狂わせるには充分だったのかもしれない。

「え……なに、これ？」

放課後の教室で一人、帰宅しようと鞆の中を整理していた楠は違和感に気が付いた。

身に覚えのない物が入っている。いや、こんな物、家にだっておいてない。

膨らんだ鞆から出てきたのは、太く、長い、淫具。

女性が自慰で使う、極太の dildo が入っていたのだ。

驚き、動揺から、遺物を手に取ると、光が彼女を襲った。

パシヤ。

光の後に続く、シャッター音。そして、現れるクラスメイトの男子が一人。

「へえ、楠ってそんな趣味あったんだ」

「……三木島くん……」

金髪にピアス、着崩した制服。

楠とは真逆のタイプの男子だ。

「いい写真撮れちゃったなあ〜ねえ、見てよこれ」

スマホの画面を見せつけられ、そこには極太デイルドを手に持つ自分が写っている。他の人が見れば、明らかに勘違いされるような一枚だった。

「これは……誰かが悪戯で……私の物じゃありません」

「だったら、クラス全員に見せても問題ないよな？」

「ッ……そんなことして、何になるんですか!」

「みーんな、楠のこと『クラスにデイルドを持つてくる変態だ』って思うだろうな」

「け、消してください!」

とびかかり、スマホを奪い取ろうとする。

しかし、運動音痴で、しかも小柄な彼女は逆に三木島に抱きしめられてしまった。

「きゃっ!?!」

「おおっと、危ない危ない。それにしても、すげー乳庄」

「へ、変なこと言わないで……離してください」

「んーそうだなあ、楠さんが俺の言うことをちょっとだけ聞いてくれたら、この写真は消してあげようかな」

「……脅し、ですか……？」

「取引だよ、別にクラスメイトから信用されてるなら、こんな写真を信じる奴なんていないだろうしな」  
(私を、信用してくれるクラスメイト……)

そんな人、いるはずがなかった。

全員に見せられれば、もしかしたら誰かが先生に報告するかもしれない。

そうになったら、親にも疑われてしまうかも。

最悪、退学になってしまう可能性だってある。

厳格な父と母は、決して私を許すことはないだろう。

と思うと、楠の肩はビクツと跳ねた。

「……何をすればいいんですか……？」

「そうこなくっちゃ。じゃあ、ついてきて」

彼女は、三木島の策略により、視聴覚室へと連れていかれてしまう。

こうして、楠 美羽という雌の本質が暴かれることになる。

☆☆☆

「本当に……それだけ、なんですすね？」

「俺だって外道じゃないんだ。ちょっと楽しませてくれるだけでいいんだよ」  
「触るだけ、ですからね」

二人っきりの視聴覚室に生唾を飲み込む音が響く。

楠は、グツと歯を噛みしめ、シャツのボタンに手を掛けた。

上から順番に一つ、また一つ外していく。

そうして三つ目のボタンを外した時、ポロンと巨大な果実が飛び出した。

「うおーすげえ爆乳！」

「ツ……あの、やっぱり……」

「だったら写真を回すだけ、だけど？」

「……わかりました」

真っ赤に顔を染めながら、腕を後ろに回し、カチッとホックを外した。  
ブルン。張りのある胸が露わになる。

三木島は唸り声を上げ、いやらしい目つきで眺めた。

「楠って、陥没乳首なんだな」

「だ、だったら、なんなんですか……」

「いや、乳に性格が出るんだなーって」

「下らないこといってないで、さっさと終わらせてください」

三木島が提示した写真を消すための条件。

それは、胸を揉ませてほしいというものであった。

(触られるだけなら大した事ないでしょう)

と、楠は思いましたのだ。

だが、三木島は眺めるだけで一向に触ってこない。

乳首に視線を集中させ、楠の様子を伺い続けていた。

「……どうしたんですか、早くしてください」

「早く触ってほしいの？」

「そんなこと！ あるわけないじゃないですか」

「でも、楠の乳首、硬くなってきてるみたいだけど？」

「ッ……は、恥ずかしいだけです……」

三木島の言う通り、確かに肉に埋まった乳首はピクピクと蠢いていた。

「へえ、楠は見られて興奮するタイプなんだ」

「やめてください……」

「オナニーは乳首でするタイプ？」

「お、オナニーって……しません！」

「本当かなあ？ こんな下品な乳して、淫乱じゃないとは思えないけどなあー」

「……胸は関係ありません……」

ピク、ピクピク。

言葉とは裏腹に、乳首はどんどん硬くなっていく。

そして、先っぽがちよこんと姿を見せた時、ようやくと三木島は手を伸ばした。

「ま、徐々に本音を引き出していくか。よっと」

「んッ……」

「うわ、おっも！」

下から持ち上げられるように、両手で乳を掴まれた。収まりきらない果実に、三木島は驚きの声を上げる。

「これ、体重の半分はおっぱいなんじゃねーの？」

「……これで、満足ですか？」

「馬鹿馬鹿、まだ全然足んねーよ」

「もう付き合いきれません、約束通り写真は消して——んッ!? あ!♡」

ビクッ! 楠は勢いよく腰を引き、甘い声を漏らす。

三木島の指先が、乳首を守る肉の壁に侵入してきたのだ。

「ちょッ……ん、あッ!♡ は、ま、待って……え!」

「ほら、凄イコリコリしてる。触ってもらえるの、期待してたんでしょ？」

「ちが……あ、あうッ!♡ はあ、はあ……あ、んッ!♡」

足が震え、立っていることさえやっとの状況。

指は乳首の先っぽを弄り、楠は敏感に反応した。

「止め、てえ……や、やだ……はひッ!?♡」

「ここが弱点で間違いなさそうだな。てか、楠って処女だろ? 喘ぎ声ヤバすぎ」

「喘いでなんか……な、い!?♡」

「ほんとー? これならどうかな?」

「んッ——おッ!?♡」

ちゅぽんっ!

穿るように動く指に、乳首は外へ露見される。

と、同時に獣のような声が楠から漏れた。

「引っ込み思案な乳首がようやくとでてきたな」

「あ……はあ、はあ……も、もう……♡」

「こんな太い乳首してて、オナニーしてませんは嘘だろ? なあ、楠」

「私は……オナニーするような、淫乱な女では……」

「真面目な女が、んな下品声出すかよ! オラッ」

「んいッ!?♡」

ギョッと力強く、乱暴に乳首を摘まれる。

刹那、敏感な乳首は高圧電流を脳に流し込まれる。

これ以上、三木島に馬鹿にされまいと食い縛っていた歯の隙間から、また声が漏れ、背筋がピンツと伸びた。



「顔ヤバ、写真撮つとこ」

「待つれッ、約束がちがっ——ん、いいッ！♡ あ、ああッ！！♡」

摘まれた乳首を乱暴に引っ張られると、女の顔は崩れ、雌になる。

その間もシャッターは幾度となく切られ、楠の蕩けた顔を記録していった。

「楠の反応最高すぎ。しかもドMとか」

「ちがッ、私は……はっ、ああッ！♡ おッおッおッ！！♡」

ギユッ、ギユッ、ギチ。

勃起乳首を撈られ、吠えた。

乱反射する快樂が、理性という鎧を壊していく。

そして——

「乳首抓られてアへ顔晒しながら否定する楠、マジで面白れー！ オラッ！ いけ、イッチまええ！」  
「ん、おッ！？♡ ら、らめええッ！♡ い、いっぢやう……う、んおッ！♡♡」

ぴゅ、ピシヤああッ！！

パンツ越しから勢いよく潮を吹き、そのままペタンと座り込んでしまった。

そう、三木島の思い通り、乳首だけで絶頂してしまったのだ。

「ホント、才能あるな、楠は。どれ、顔を見せてみるよ」

「あ……はあ、はあ……♡」

顎に手を当て、クイっと上に持ち上げる。

舌を垂らしながら、虚な目をする楠。

雌に成り下がった表情をすかさず写真に収めると、三木島はこう言った。

「今日はこのくらいにしといてやるよ、約束通り写真も消しておく」

「い、今の写真……はぁ……♡」

「こっちはまた別だ。じっくり開発してやるからな、楠」

また明日の放課後に、と言い残し、三木島は去っていく。

(う……最低な人に弱みを……けど、この……)

残された焦燥感と恐怖——そして、感じてはならない期待を胸に、一日目は終わりを迎えたのだ。